

News Letter

Vol.37
2025.12.10

私たちと国連



SDGs スローガン

「誰一人取り残さない」
を今こそ！

～誰もが自分ごととして考え、
自分にできることを探そう～

SDGsの達成年度まで、あと5年。多くの女性に彼女は私だと思わしめた一人の被害女性の事例を通し、ジェンダー社会の様々な課題を掘り下げ考えます。

2020年11月16日早朝に、渋谷区内のバス停前のベンチに座って眠っていた女性が、中年男性に石で殴られ殺された事件。路上生活者の64歳女性は、コロナ禍の影響で失業、所持金は僅か8円でした。この事件は、当時、「彼女は私だったかもしれない」と女性たちの心を揺さぶりました。

2025年秋、当会も加盟している国際婦人年連絡会が、2025 NGO日本女性大会を開催しました。セッションの終わりに、参加者の一人がこの事件について質問しました。「今日は5年前にバス停で殺された女性の命日。あれはフェミサイド。自分が評価されていないと思った男性が起こした事件だと思うが、そういう人たちを納得させる言葉を自分は持ちえない。『男だって恵まれていないんだ』と言われた時に、どう言葉を返されているのですか、伺います」と。

4名の登壇者は、「女性運動にあらゆる問題の解決を押し付けないで。男の問題は男が解決すべき。女も男もつらいよ合戦になっているが、明らかなジェンダー非対称性がある。『女は女であることがつらい、男は男になれないことがつらい』。弱者男性のつらさを作り出しているのは、男性集団からそのような男性を周辺化している男性集団の構造。その付けを女に回さないで」(上野千鶴子氏)、「命日を忘れていた自分に愕然とした。あれは私だったかもしれないと思い、どんな選択でも尊厳をもって生きられる社会が必要、と卒業式の式辞にその話を織り込んだ。『女性も偉くなるのが大事という価値観があったが、皆さんに出世しろとは言いたくない。全体をよく見て。これはあなた達かもしれない。女性同士で何を見つめ合うか、社会に出る前に考えて』と」(田中優子氏)、「弱者の怒りや鬱憤が攻撃性になっていく時、どうしたらよいか。政治的経済的要素を含んでいると思う。英国のブレグジット(2019年のEU離脱)も北部の高齢白人男性たちが支持した結果。マジョリティの周辺化、底が抜けている状態が起きている。それを考えねば。そのような中、NY市長選でマムダニ氏が「できるんだ」と戦う姿勢を見せてくれた」(岸本聡子氏)、「あなたの問題を押し付けないで、と言える強さを私も持ちたい」(能條桃子氏)とそれぞれに応えました。あなたはどの意見に共感されたでしょうか?この事件の背景には、日本女性の貧困率19%(OECD最下位)、自己責任を強いるネオリベリズム(新自由主義)、格差が死角化される消費社会、申請主義の日本の福祉制度、ホームレス排除のための「仕切りアート」等の課題が隠されています。

救済に奔走する支援団体に大きく影響したUSAID(米国国際開発庁)解体の波紋は、現紛争地域をはじめアフリカのマラリア・HIV/エイズ・母子保健などへの深刻な影響も懸念されています。内外を問わず、「女性の権利は人権である」と言い続ける状況がまだまだ続いています。(城倉純子)



UN Womenサイトより



10月11日の国際ガールズデーには、セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ(性と生殖に関する健康と権利)が、特にアジア大洋州地域でいかに少女たちから奪われているかという現状報告がありました。以下は講演内容の概要です。

思春期の危険、その現状 福田氏が担当しているアジア大洋州地域 (アジア及び太平洋の島嶼国) には 10 億人がいますが、その中で暮らす 10～25 歳の女子には、予期せぬ妊娠をするものも多く、妊娠出産による合併症で死に至る者も少なくありません。それは、身体の自己決定権を持ってないからです。特に性感染症や HIV/エイズの感染が急増しており、その場合には 6 人中の 1 人は性暴力による被害者です。家族計画は結婚していない場合にも広くとらえる必要がありますが、実現するのは難しいのが現状です。

性と生殖に関する保険サービスの必要性 性と生殖に関する保険サービスの提供体制には、法的、文化的、保険システム上の障壁があります。昔とは事情も変わってきているのでそれを受け入れることが必要ですが、現在でも児童婚や早期結婚、強制婚などが多発しています。法改正が進んでいても女性性器切除 (FGM) は今も根強く残っています。例えばアフガニスタンは特に男性優位な社会なの

で問題が大きくなっているようです。病院で行われて安全な施術になったということで、執刀する女医さんが FGM を何ら問題視していない現実こそが、問題ではないでしょうか。

また生理があるのは人口の1/4であるにも拘らず、生理が大切にされていないことは大きな問題です。

包括的性教育が必要 このような問題を解決するには、包括的な性教育が必要とされるでしょう。まずは正確な知識と行動に移せる情報を得ることが大切、それによって自己決定権、自己肯定感につながるができるでしょう。情報やサービスを提供することによって、安全な性行為に導き、意図しない妊娠、エイズなどの感染症を防ぐことができ、自尊感情を高めることができるでしょう。

国際家族計画連盟 (IPPF) の今後の活動 IPPF は、世界 142 カ国でセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス関連の支援、助言、サービス、物資を、IPPF 加盟協会を通して提供しています。今後はこの地域の支援を強める必要があります。それには、①人を中心に据えたケア、②セクシュアリティの課題を前進させる、③変革のための連帯、④連盟と共に育てる、を目指して活動を展開し、実質的で意義ある参画をすることが必要と語られました。

(阿部幸子)



2025NGO 日本女性大会 「わたしたちは歩みつづける『北京+30』 女性の権利は人権である」 成功裏に終了

5年ごとに開催されるこの大会は、1975年に結成され、今年50年を迎えた国際婦人年連絡会が主催する大きな行事であり、今年度は11月16日(日)エッサム神田ホール2号館で10:00から16:00まで、魅力的なゲストを迎え、充実した事業であった。

各団体から選ばれた実行委員による実行委員会は、2024年度半ばから最終の11月12日までほぼ毎月開催され、多くの知恵や情熱により磨かれていった。

開会に当たっての来賓挨拶では、内閣府男女共同参画局長 岡田恵子氏のメッセージが代読され、上野千鶴子氏(NPO法人ウィメンズアクション

ネットワーク理事長)は会場から大きなエールを送られた。

その後前田世話人からの基調報告があり、続いて8つの分野別委員会、国連関係特別委員会各委員長から活動報告が、武川恵子元内閣府男女共同参画局長から基調講演「北京から30年・我々の世代で残された課題の解決を」があった。現在昭和女子大学特命教授である武川元局長は、現役時代とは違い、個人としての思いを十分に聞かせて下さり、それがとても新鮮であった。

昼食休憩後のパネルディスカッションでは、若者代表として①能條桃子さん(NO YOUTH NO



映画パッケージより

暑さの残る9月22日(月)の午後、東京ウィメンズプラザ2階の会議室で勉強会を開催しました。今回はインド映画『マダム・イン・ニューヨーク』を上映、この作品を通して語られるメッセージから、改めて「自立して生きるとは？」を考えてみることにしました。

この映画は2012年作、2014年に日本で公開され、今も映画会が開かれ、オンラインサイトでもよく観られている作品です。監督はガウリ・シンディー、主人公はインドのごく普通の主婦(シュリデヴィ主演)、そんな彼女が姪の結婚式の手伝いで単身ニューヨークへ。苦手な英会話を習得することで、自信と自らの尊厳を取り戻していく物語です。

連休の谷間の月曜日が開催日だったためか、当日の参加者は20名程度ではありましたが、2時間14分の上映時間はあっという間に過ぎ、その後の60分の討論時間では、熱心な意見交換の場が持たれました。

参加者の感想から

料理も家事も完璧にこなす主人公シャン。ただ英語ができないという理由だけでなぜ子供たち、夫からここまで軽んじられなければならないのだろうか。インド社会においては、女性は家庭の中にとどまり、自分の声をあげる事は許されないのだろうか。まるで昔の日本を見ているようで胸が痛んだ。しかしシャンはニューヨークで、自ら英会話教室に通い自分の道を歩み、自分の世界を広げ、自信と尊厳を取り戻していく。結婚式での堂々としたスピーチには長く抑え込まれてきた思いがあふれ出ており胸を打たれた。英会話教室でシャンは様々な国の人々と出会う。彼らに対しシャンは誰よりも素直で、その人の本質を見ようと努める。それは彼女自身の辛い経験が他人の痛みを理解する力となっているのだろう。彼女のやさしさの裏には強さがある。そして英語を通じて、自信を取り戻し、人生を変えていった

ように、私たちが「学ぶこと」から人生をより豊かにできるのではないだろうか。大学の恩師は常に、私達学生に「勉強は大学だけでなく生涯続けるものだ」と教えて下さった。又別の先生は「年をとればとるほど頑固になりがちだが、考え方こそ柔軟性を持たなければならない」と話されていた。この映画を通じ、このような教育を受けられた事は幸せなことだったと思う。(望月よし子)



● 参加費の一部を募金に充てさせていただきました。

JAPAN 代表理事)、②杉並区長 岸本聡子さん、③法政大学前総長 田中優子さんの3名のパネリストから講話があり、上野千鶴子さんからコメントーターコメントを頂いた。パネリスト同士の意見交換後、会場などからの質疑応答もあり、今日の行事を中国のSNSで知り、参加のため、わざわざ来日したという若者もあった。世界にはいろいろな問題があり、すべてが気になっても何を発信すべきか、すべてに責任を持つことは難しく、自分が関心のある事柄について、自分のできる範囲で関わり、深めていけば良いのではないかという助言もあり、気持ちが楽になったと、後で聞いた。



パネルディスカッションの様子

最後に2025NGO日本女性大会の大会決議を確認し、皆で「翼をください」を共に歌い、閉会となった。

準備が十分だったため、各担当が時に応じ、臨機応変に対応し、充実した、心地良い集会となった。会場出席者130名、オンライン参加申込者80名、盛会であった。(実行委員 牧島悠美子)

ご案内 2026年度 定例総会のお知らせ

下記の通り2026年度の定例総会を開催いたします。
総会終了後には話題提供者（交渉中）を囲んでの交流会を、また
12:30～13:30にはバザーを開催いたします。懇談のできる良い
機会でもありますので、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日時：2026年2月16日（月）13:00 受付開始
会場：今井館 2階会議室

次第：

第1部 総会（対面にて実施） 13:30～14:40
第2部 交流会 15:00～16:30

詳細につきましては、後日、はがきでお知らせいたします。



<アクセス> 今井館
JR線 駒込駅南口・徒歩12分
都営三田線 千石駅 A4出口・徒歩5分
南北線 駒込駅2番出口・徒歩8分



事業部から バザーの出店にご協力を！

当会では毎年5～6回のバザー出店を実施、皆様からの温かいご支援の賜物である売上げ収益を、他の事業収益金と合わせ、国連ウィメン日本協会を通してUN Womenに拠出金として送っています。難民キャンプや紛争地で救済活動にあたるUN Women及び現地採用スタッフの資金、また女性と少女のためのエンパワーメント・プロジェクト資金等に活かされます。大幅な支援金削減の影響が懸念される今、少しでも多くの支援金を現場への要請が加速しています。

毎年埼玉県上尾市文化センターで開催される友清音楽院（代表：友清創氏）主催のクリスマス・コンサートにも、毎年出店させて頂いています。友清和親氏と創氏が中心となって展開する音楽院の活動は、長年に亘って音楽を愛する地域の温かい交流と文化を育んできました。当会へのUN Women寄付も長年継続頂いております。上尾市の皆さんとふれあいながら、UN Womenの広報活動をさせて頂けることに深く感謝しています。



たくさんのご寄付・ご協力をいただき有難うございました。

（敬称略）

寄付者（2025年4月1日～2025年11月25日）

高木宏子 長濱節子 大館純子 金子裕子 立木冬麗 梅田和子 天野美津子
加藤聖子 中務安紀子 山崎節子 鈴木千鶴子 荒井明美 福田文子 縄田真紀子
阿部幸子 碓谷真理 渡辺みち子 太田恵子 田中一久 中山正子 牧島悠美子
青短卒業生有志 匿名5件

新入会者 田中一久



ご意見ご感想はこちらまで E-mail:unwomentokyo@unwomentokyo.org

編集後記

◆格差社会の日本では誰もが日常生活の維持に必死。SDGsの目標は17項目あり、貧困撲滅は目標1、ジェンダー平等の達成は目標5に。「ビッグイシュー」というホームレス自立支援のための雑誌がある。最初は一人に10冊づつ支給され、販売収益の半分がその人の収入になる仕組み。JR四谷駅前では時々購入する。男性は申し訳ないといった仕草で渡してくれるが、自信をもって販売をと思いつつ電車に乗る。(J)
◆今回も充実した内容になった。校正を手伝いながら、ふと昔の記憶が蘇る。随分昔のことだが、通勤途中の渋谷駅のコンコースに、そこで寝泊まりしている数人の男性に交じって一人の女性がぼつんと座っていることに気付いた。どんな事情なのだろうか？声もかけられずに数年が過ぎ、ある日突然姿が見えなくなった。その後どうしているのだろうか。話を聞いてあげればよかったという思いがずっと残ったが、今なら寄り添って話を聞く勇気も持てるかも知れない。もしかしたらこの記憶が支援活動の原点になっているのかも知れないと思った。(A)

国連ウィメン日本協会東京

News Letter Vol.37

発行人：会長 城倉純子

発行日：2025年 12月10日

〒167-0042

東京都杉並区西荻北3-11-3-105

Tel/Fax 03-6913-9946

http://unwomentokyo.org